ダクシナーの伝統

アミ・バンサルによる解説

インドについて考えてみてください。あなたのマインドに何が思い浮かびますか。私のマインドに最初に浮かぶのは、それがどれほど古いか――その文化がどれほど豊かで名高いか、その哲学がどれほど深遠であるか、その発明がどれほど独創的であり、その創造性がどれほど果てしないか――ということです。インドには無数の宗教、多様な習慣や言語、そして日常生活に精神的な援助をする英知や伝統についての多くの側面があります。

インドの生徒が学ぶこの古代の英知の一つの側面は、知識を授けてくれる師にささげ物をすることの重要性です。私は特に精神的な道――つまり大いなる自己の英知を受け取るために弟子がグルに近づくこと――に焦点を合わせたいと思います。インドの教典は、絶対なる者の知識を切望している者に、グルに近づく方法の指示を与えています。弟子は、謙遜、献身、奉仕する意欲を持って――そして両腕にはできるだけの最高のささげ物を持って――グルの前に来るべきです。弟子からグルへのこれらのささげ物はダクシナーと呼ばれます。太古の昔から、ダクシナーをささげることはすべての弟子のダルマでした。

サンスクリット語のダクシナーには多くの素晴らしい意味があります。この単語の伝統的な語源分析では、音節ダは「提供すること」や「与えること」を意味し、音節クシは「住むまたは居住する」を意味し、音節ナーは「知識」を意味します。そこでダクシナーは、生徒が先生にささげ物をすることであり、それを通じて生徒は授けられた知識の中に確立するのです。

知識の源泉にささげ物をするというこのダルマは、神の実現へと至る道において、最も重要です。ヴェーダの超越的な本質を抽出するウパニシャッドは、神聖な知識――大いなる自己の

知識――を与える師にささげ物をするという弟子のダルマ、不可欠な義務についての教えを伝えています。教典は、これらのささげ物が――金、銀、牛、穀物、衣類、一区画の土地、または他の物資など――さまざまな形でどのようになされたかを説明しています。それぞれの弟子は自分の資力に応じてささげました。

ウパニシャッドはまた、知識を切望する生徒が、それと共に自らのささげ物をするべきであるバーヴァについて語っています。バーヴァは、人の存在の状態、彼らの内面の現実、彼らの生来の気質を表します。誰もが独自のバーヴァを持って生まれています。とは言うものの、神聖な知識に至る道を歩む探究者は、シュリー・グルの恩恵と導きを通して、そして自らのタパシヤを通して、彼らの熱心な精神的な規律を通して、その精神的な努力を高揚させ、支援するバーヴァを育てることができます。彼らは、与えることのバーヴァ、無私無欲のバーヴァ、敬意のバーヴァ、賢明さのバーヴァなどを育むことができます。彼らは、純粋で利他的なこれらのどのバーヴァでも、その純粋な存在の境地に確立し、思考、言葉、行動がその空間から流れるように、意識して努力することにより育みます。バーヴァを養えば養うほど、それはその人の性格に、より本質的になります。そしてやがて、それは彼らのスワ・バーヴァ、その人自身の自然で、特有の、努力を要しない存在の境地になる可能性を秘めています。

『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』は、与えることのバーヴァについて次のように教えています。

श्रद्धया देयम् । अश्रद्धयाऽदेयम् ।
श्रिया देयम् । ह्रिया देयम् ।
भिया देयम् । संविदा देयम् ।

śraddhayā deyam । *aśraddhayā'deyam* ।
śriyā deyam । *hriyā deyam* ।
bhiyā deyam । *saṁvidā deyam* ।

信念を持って与えなさい。決して信じることなく与えてはならない。

たくさん与えなさい。謙虚に与えなさい。

最大の畏敬の念を持って与えなさい。
きらめく大いなる意識で
満ちあふれた心で与えなさい。

精神を高揚させる『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』の原則に従い、師から知識を得ようとする古代のインドの生徒は、師に最大の誠意を込めてささげ物をしました。インドの教典や叙事詩の中には、どのように弟子がグルにダクシナーのささげ物をし、その結果、どのように神聖な錬金術が起こるかを描写した話がたくさんあります。例えば、『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』の中のサッティヤカーマ・ジャーバーラの古典的な話があります。

この話の中で、貧しい生まれの若い探究者であるサッティヤカーマ・ジャーバーラは、偉大な賢人ガウタマに近づき、生徒として受け入れてくれるように頼みました。サッティヤカーマは、絶対なる者であるブラフマンの知識を学びたいと切望していました。グルは慈悲深くサッティヤカーマを受け入れました。しかし、ブラフマンの教えを授ける前に、グルはサッティヤカーマに400 頭の痩せて弱った牛を与え、その世話をよくするように命じました。

牛に草を食べさせるために森へ連れて行く途中で、サッティヤカーマは、「これらの牛の数が千頭になるまで、師の元には、絶対に戻らない」と自分に約束しました。サッティヤカーマにとって、それらの増えた分の牛は、自分の努力から生じる富と、恩恵と英知の源泉であるグルにダクシナーをささげる可能性を表していました。

何年もの間、サッティヤカーマは森の中に住み、愛情を込めて牛の世話をしました。サッティヤカーマがとても誠実に、そして気を配って世話をしたので、牛は強くて健康になり、数も増えました。そしてついには、千頭になりました。ある日、サッティヤカーマが、牛を監視し、グルを思いながら、インドボダイジュの木の下に座っていると、群れの中でも年取った雄牛が彼に話し掛けました。「おお、サッティヤカーマ、今や我々は千頭になりました。私たちをグルの家へ連

れて行ってください」。サッティヤカーマは、年取った雄牛にお礼を言いました。とても驚いたことに、その雄牛は、ブラフマン、絶対なる者のある側面について、今度は解説を始めました。

サッティヤカーマがグルのアーシュラムに帰る途中、毎日自然の要素と生き物たちがブラフマンのいろいろな面について明らかにするのでした。まず、小さな火が彼にすべてに遍在する神について説明しました――次は野生のガン、そして水鳥が。引き続き驚いたことには、帰路を通してずっとサッティヤカーマは、絶対なる者の輝きと無限について深遠な教えを受けたのでした。

サッティヤカーマが千頭の牛を連れてグルのアーシュラムに戻ると、彼は達成した光で輝いていました。そして、彼は持っている知識に匹敵する途方もない謙虚さを体現していました。サッティヤカーマの全存在が静穏の存在を反映しているのでした。

賢人ガウタマは、弟子の素晴らしい変容ぶりを目の当たりにしました。その目の表情は、分かっているということと紛れもない誇りそのものでした。彼は、サッティヤカーマに言いました。「おまえは、ブラフマンを知っている者のように輝いている。その教えをおまえに与えた者は、誰だ？」

サッティヤカーマは、深い敬意を持って答えました。「私はブラフマンについての教えを自分の周りにあるすべてのもの――植物、動物、要素――から受け取りました。ですが、私の最愛のグル、私は絶対なる者の完全な知識をまだ切望しています。どうか、私に教えていただけませんか？」 賢人ガウタマは、サッティヤカーマにほほ笑み掛け、残りの教えを授けました。このようにして、サッティヤカーマの絶対なる者の理解は、完全なものとなりました。

私は、このウパニシャッドの話を読んだり、グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダが話すのを聞いたりするたびに、学ぶべき多くのことに気づきます。この話やダクシナーに関する教典の他

の教えは、私にとってサーダナーにおけるこの神聖な修行の価値をはっきりと示す助けとなっています。そして、仲間の探究者や学者との会話の体験からも、このことがたくさんの人にとっても本当だということを知っています。この話を読むか聞く機会があると誰にでも、シュリー・グルにささげ物をすること――ブラフマンの知識を体現し、その知識を私たちに授ける者にささげること ――の重要性をはっきり詳細に説明していることが分かります。

これらの話や教典の教えは、私たちがシッダ・ヨーガのグルたちから学んだことをさらに例証する助けとなります。つまり、ささげることで、弟子は受け取り、真理の中に確立するのです。

© 2022 SYDA Foundation. 著作権所有。